

歴史と異国で翻弄されたサーカス芸人

大島 幹雄著

明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか

モスクワとサンクトペテつまリ、音郎らのハラキリブルグで、演劇を上演しリの流れは、ヤマダサーカスなどがある。川上音二郎がパリで上演した時、切腹のシーンを入れ、受けたことを知っていたので入れた。そのシーンになると「ハラキリ、ハラキリ」と観客はざわめき、拍手喝采の大コーンとなった。

革命前のロシアで、ハラキリショーを行い、大人気のヤマダサーカスがあったと、本書にある。このショーは、舞台上駆け込んできた少年を捕まえ、押さえて、刀で腹から喉へ、喉から腹へと切りつける衝撃的なものだったとか。警察沙汰にもなっている。

川上音二郎、貞奴一座をプロデュースしたロイ・フラーというダンサーは、花子という名の芸者あがりの踊り子を使い「ハラキリ」を、英、仏、そしてロシアで公演し、人気となった。

興奮を禁じ得ない

ロシア革命の演劇、
粛清にまで触れる

高 取 英

む。山根ハルコは、山田曲馬団の一員として、十一歳の時、ウラジオストックから始まり、十五年間ロシアを興行したという。網渡りが得意な彼女は、それだけでなく、マジックのため箱に入り、洋剣を突き刺されたと。山根ハルコは、一座の野口孫次郎と結婚し、

バクーで暮らしていたが、ロシア革命が勃発し、そして夫の野口はブランクの逆立ちから墜落し死亡する。そして母とも別れたハルコは日本大使館に行き、大使館は、ハルコのことを日本に問い合わせた。外交史料館にある、無旅券者身元取調の書類に、野口孫次郎に、野口孫次郎に、

ハルコは日本大使館に行き、大使館は、ハルコのことを日本に問い合わせた。外交史料館にある、無旅券者身元取調の書類に、野口孫次郎に、野口孫次郎に、

ハルコは日本大使館に行き、大使館は、ハルコのことを日本に問い合わせた。外交史料館にある、無旅券者身元取調の書類に、野口孫次郎に、野口孫次郎に、

ハルコは日本大使館に行き、大使館は、ハルコのことを日本に問い合わせた。外交史料館にある、無旅券者身元取調の書類に、野口孫次郎に、野口孫次郎に、

ハルコは日本大使館に行き、大使館は、ハルコのことを日本に問い合わせた。外交史料館にある、無旅券者身元取調の書類に、野口孫次郎に、野口孫次郎に、

らである。それは、著者が、ロシア・アバンギャルドをテーマに卒論を書き、その後、ソ連のサーカスを呼ぶ仕事をしていたからである。

すなわちロシア革命後の文化大臣ルナチャルスキー、詩人マヤコフスキーや演出家メイエルホリドなどを尊用した彼が、サーカスを革命文化として重要視し、彼の後押しで、「サーカス演劇」が展開されたことをも書いているからである。演劇のサーカス化をめざした「民衆喜劇座」についても書いている。この劇団への連帯の声明文の一人にヤマダサーカスに合流したサーカス芸人タカシマ・タツノスケがいることも著者は書く。

さらに、サーカス団の一員としてロシアに行き、ソ連共産党にも入党したヤマダサーカスの「ハラキリショー」の少年の可能性もあると、著者はいう。

スターリンによる粛清の時代、ヤマサキは、逮捕され、銃殺される。逮捕され、銃殺される。逮捕され、銃殺される。逮捕され、銃殺される。

野口がモスクワから追放された。本書は、ヤマサキの息子、アレクセイによる父の名譽回復について、さらにヤマダサーカスにいたシマダについても触れている。シマダもまた粛清された。その国籍は実は…。ロシア革命の演劇、そして粛清にまで

触れた本書は、歴史と異国で翻弄されるサーカス芸人を描き、興奮を禁じ得ない。(たかとり・えい氏)劇作家・月蝕劇団代表



四六判・254頁・1680円
祥伝社
978-4-396-61463-8

★おおしま・みきお氏はサーカス・プロモーター。アフタークラウディカンパニー勤務。石巻若宮丸瀬流民の会事務局長、早稲田大学非常勤講師。著書に「サーカスは私の入大学」だった「満州放浪」ほか。「一九五三(昭和28)年生。